

P-6

測度をポテンシャルに持つ2次元シュレーディンガー作用素の固有値について  
 An eigenvalue of 2-D Schrödinger operator with potential-measure

竹瀨 和希<sup>1</sup>  
 Kazuki Takebuchi<sup>1</sup>

Abstract: We consider two dimensional Schrödinger operators with potential-measure  $H_{\alpha\mu} = -\Delta - \alpha\mu$ . Here,  $\alpha > 0$  is a small parameter, and  $\mu$  is a Radon measure belonging to generalized Kato's class. We assume that there exists a unique eigenvalue  $\lambda(\alpha)$  of  $H_{\alpha\mu}$ , and this eigenvalue is negative. We study asymptotic behavior of this eigenvalue as  $\alpha \rightarrow 0+$ .

1. シュレーディンガー作用素の固有値問題

2次元シュレーディンガー作用素のスペクトルについて考察する。まず、 $\mathbb{R}^2$  上のラプラス作用素  $-\Delta$  のスペクトルについては、よく知られているように  $\sigma(-\Delta) = [0, \infty)$  である。ここで、 $\sigma(-\Delta)$  は  $-\Delta$  のスペクトルを表す。そこでラプラス作用素  $-\Delta$  に一般化された Kato クラスに属するラドン測度  $\mu$  をポテンシャルに持つ2次元シュレーディンガー作用素  $H_{\alpha\mu} = -\Delta - \alpha\mu$  を考える。ここで、 $\alpha > 0$  は正の実数とする。 $H_{\alpha\mu}$  の固有値  $\lambda(\alpha)$  がただ一つ存在し、その値が負の時、 $\alpha \rightarrow 0$  とした時の  $\lambda(\alpha)$  と対応する固有関数の挙動を調べた論文 [4] について報告する。以下、 $L^2_\mu = L^2(\mathbb{R}^2; d\mu)$  とする。

定義 1.1.  $\mathbb{R}^2$  上のラドン測度  $\mu$  が一般化された Kato クラスに属するとは、

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow +0} \sup_{x \in \mathbb{R}^2} \int_{|x-y| < \varepsilon} |\log|x-y|| d\mu(y) = 0$$

を満たすことである。 $K$  を  $\mathbb{R}^2$  上の一般化された Kato クラスに属するラドン測度  $\mu$  で  $\mu(\mathbb{R}^2) < \infty$  となるものなす集合とする。

Kondej-Votoreichik [4] は次を示した。

定理 1.2.  $\mu \in K$  とし、十分小さい  $\alpha > 0$  に対して、ただ1つの  $H_{\alpha\mu}$  の負の固有値  $\lambda(\alpha)$  が存在したとする。このとき、以下が成り立つ。

1.  $H_{\alpha\mu}$  の固有値  $\lambda(\alpha)$  は、 $\alpha \rightarrow 0+$  の時、

$$\lambda(\alpha) = -(C_\mu + o(1)) \exp\left(-\frac{4\pi}{\alpha\mu(\mathbb{R}^2)}\right)$$

と表せる。ただし、 $C_\mu > 0$  は  $\mu$  に依存する定数である。

2. 固有値  $\lambda(\alpha)$  に対応する固有関数  $f_\alpha(x)$  は、 $\alpha \rightarrow 0+$  の時、

$$f_\alpha(x) = \frac{\sqrt{-\lambda(\alpha)}}{2\pi} \int_{\mathbb{R}^2} K_0(\sqrt{-\lambda(\alpha)}|x-y|)d\mu(y) + O\left(\frac{1}{\log\sqrt{-\lambda(\alpha)}}\right)$$

と表せる。ただし、 $K_0(\cdot)$  は修正ベッセル関数である。

修正ベッセル関数  $K_0(\cdot)$  を用いてラプラス作用素  $-\Delta$  の  $\lambda < 0$  に対するレゾルベント  $(-\Delta - \lambda)^{-1}$  は、 $f \in L^2(\mathbb{R}^2)$  に対して、

$$(-\Delta - \lambda)^{-1}f(x) = \int_{\mathbb{R}^2} K_0(\sqrt{-\lambda}|x-y|)f(y)dy$$

と積分表示できる。そこで、 $f \in C_0^\infty(\mathbb{R}^2)$  と  $x \in \text{supp } \mu$  に対して、

$$Q(\lambda)f(x) := \int_{\mathbb{R}^2} K_0(\sqrt{-\lambda}|x-y|)f(y)d\mu(y),$$

$x \in \mathbb{R}^2$  に対して、

$$R_{\mu dx}(\lambda)f(x) := \int_{\mathbb{R}^2} K_0(\sqrt{-\lambda}|x-y|)f(y)d\mu(y)$$

と定める。

命題 1.3.  $L^2_\mu \ni h \mapsto R_{\mu dx}(\lambda)h \in H^1 \cap L^2_\mu$  は、 $\ker(I - \alpha Q(\lambda))$  から  $\ker(H_{\alpha\mu} - \lambda)$  への全単射である。

この命題を用いることで、 $H_{\alpha\mu}$  の固有値問題を、 $Q(\lambda)$  の固有値問題に置き換えることができる。 $k > 0$  に対して  $\lambda = -k^2$  と置き、 $Q(-k^2)$  を考える。すると、 $f \in L^2_\mu$  に対して、

$$Q(-k^2)f(x) = -\frac{1}{2\pi} \log k \int_{\mathbb{R}^2} f(y)d\mu(y) + \frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}^2} (-\log|x-y| - C_E + \log 2)f(y)d\mu(y) + O(k^2 \log k) \|f\|_{L^2_\mu} \quad k \rightarrow 0+$$

が成り立つ。ただし、 $C_E$  はオイラー定数である。ここで、

$$Rf(x) := \frac{1}{2\pi} \int_{\mathbb{R}^2} (-\log|x-y| - C_E + \log 2)f(y)d\mu(y)$$

と定めると、これは  $L^2_\mu$  での有界作用素となる。

補題 1.4.  $Q(-k^2)$  のスペクトルのうち、0 近傍にあるものを  $\sigma_0(Q(-k^2))$ 、1 近傍にあるものを  $\sigma_1(Q(-k^2))$  とし、 $Q(-k^2)$  のただ1つの固有値  $\gamma(k)$  が存在し、 $\sigma_1(Q(-k^2))$  は  $\gamma(k)$  のみからなるとする。このとき、以下が成り立つ。

1: 日大理工・院(前)・数学

1. 任意の  $\varepsilon > 0$  に対して, 十分小さい  $k > 0$  が存在して,

$$\sigma(Q(-k^2)) = \sigma_0(Q(-k^2)) \cup \sigma_1(Q(-k^2)),$$

$$\sigma_0(Q(-k^2)) \cap \sigma_1(Q(-k^2)) = \emptyset$$

となる.

2.  $\gamma(k)$  は連続で,  $k_1 < k_2$  に対し,  $\gamma(k_1) > \gamma(k_2)$  であり,  $k \rightarrow 0+$  の時,  $\gamma(k) \rightarrow +\infty$  となる.

## 2. 非解析的摂動理論

$H$  をヒルベルト空間とする.  $k > 0$  に対して,

$$T(k) := T_0 + \frac{1}{\log k} T_1 + O\left(\frac{1}{\log^2 k}\right) \quad k \rightarrow 0+$$

で表される  $H$  上の自己共役作用素を調べる. ただし,  $\|\varphi\|_H = 1$  を満たす  $\varphi \in H$  と,  $\psi \in H$  に対して,  $T_0\psi = (\psi, \varphi)_H \varphi$  であり,  $T_1$  は  $H$  で有界な自己共役作用素である.

**定理 2.1.**  $T(k)$  のスペクトルのうち 0 近傍にあるものを  $\sigma_0(k)$ , 1 近傍にあるものを  $\sigma_1(k)$  と表す.  $T(k)$  のただ 1 つの固有値  $\omega(k)$  が存在し,  $\sigma_1(k)$  は  $\omega(k)$  のみからなるとする. このとき,  $T(k)$  のスペクトル  $\sigma(T(k)) \subset \mathbb{R}$  は, 十分小さい  $k > 0$  に対して,

$$\sigma(T(k)) = \sigma_0(k) \cup \sigma_1(k), \quad \sigma_0(k) \cap \sigma_1(k) = \emptyset$$

と表せる. また, 次が成り立つ.

1. 固有値  $\omega(k) \in \sigma_1(k)$  に対応する正規化された固有関数  $\varphi_k$  は,  $H$  のノルムの意味で

$$\varphi_k = \varphi + O\left(\frac{1}{\log k}\right), \quad k \rightarrow 0+$$

をみたす.

2. 固有値  $\omega(k) \in \sigma_1(k)$  は

$$\omega(k) = 1 + \frac{1}{\log k} (T_1\varphi, \varphi) + O\left(\frac{1}{\log^2 k}\right), \quad k \rightarrow 0+$$

をみたす.

## 3. 主定理の証明の概略

$\mu \in K$  に対して

$$T(k) := -\frac{2\pi}{\mu(\mathbb{R}^2) \log k} Q(-k^2) \quad (2)$$

とすると (1) から,  $k \rightarrow 0+$  の時,

$$T(k)f(x) = \frac{1}{\mu(\mathbb{R}^2)} \int_{\mathbb{R}^2} f(y) d\mu(y) - \frac{2\pi}{\mu(\mathbb{R}^2) \log k} Rf(x) + O(k^2) \|f\|_{L^2_\mu}$$

となる.  $T_1 = -\frac{2\pi}{\mu(\mathbb{R}^2)} R$  とすると, これは  $L^2_\mu$  で有界で, 定理 2.1 を使うことができる.  $\varphi = \frac{1_{\text{supp } \mu}}{\sqrt{\mu(\mathbb{R}^2)}}$  に対し,  $\alpha \rightarrow 0+$  とする時,

$$\omega(k(\alpha)) = 1 - \frac{2\pi}{\mu^2(\mathbb{R}^2) \log k(\alpha)} (R1_{\text{supp } \mu}, 1_{\text{supp } \mu})_{L^2_\mu} + O\left(\frac{1}{\log^2 k(\alpha)}\right) \quad (3)$$

と表せる.  $Q(-k^2(\alpha))$  の固有値  $\gamma(k(\alpha))$  は,

$$\gamma(k(\alpha)) = -\frac{\mu(\mathbb{R}^2) \log k(\alpha)}{2\pi} \omega(k(\alpha))$$

と表すことができる.

$\lambda(\alpha) = -k^2(\alpha)$  と置くと, (2) と命題 1.3 より

$$\alpha \gamma(k(\alpha)) = -\frac{\alpha}{2\pi} \mu(\mathbb{R}^2) \omega(k(\alpha)) \log k(\alpha) = 1 \quad (4)$$

が得られる. (3) を (4) に代入し,  $\log k(\alpha)$  について整理すると,  $\alpha \rightarrow 0+$  の時,

$$\log k(\alpha) = -\frac{2\pi}{\alpha \mu(\mathbb{R}^2)} + \frac{2\pi}{\mu^2(\mathbb{R}^2)} (R1_{\text{supp } \mu}, 1_{\text{supp } \mu}) + o(1)$$

となる. この等式を

$$\lambda(\alpha) = -k^2(\alpha) = -\exp(2 \log k(\alpha))$$

に代入すれば  $\lambda(\alpha)$  の展開が得られる.

## 4. 参考文献

- [1] J. F. Brasche, P. Exner, Yu. A. Kuperin, P. Seba, *Schrödinger operators with singular interactions*, J. Math. Anal. Appl. **184** (1994), 112-139.
- [2] J. Dancis, Ch. Davis, *An interlacing theorem for eigenvalues of self-adjoint operators*, Linear Algebra Appl. **88/89** (1987), 117-122.
- [3] T. Kato, *Perturbation theory for linear operators*, 132, Springer, 1966.
- [4] S. Kondej, V. Lotoreichik, *Weakly coupled bound state of 2-D Schrödinger operator with potential-measure*, J. Math. Anal. Appl. **420** (2014), 1416-1438.
- [5] V. Kostykin, K. A. Makarov, A. K. Motovilov, *Perturbation of spectra and spectral subspaces*, Trans. Amer. Math. Soc. **359** (2007), 77-89.
- [6] 新井仁之, 新・フーリエ解析と関数解析学, 培風館, 2012.
- [7] 谷島賢二, シュレーディンガー方程式 I,II, 朝倉出版, 2014.